

# 第二十六回 新城薪能

## 能組

とき 平成二十七年八月二十二日(土)  
午後四時始  
ところ 新城文化会館大ホール

仕舞 葛城 伊藤紗佳  
経政 恩田衣恋

連吟 黒塚  
シテ 永田聡子  
ワキ 竹下京子  
ツキツレ 小林寿枝  
地謡 鈴木富代  
伊藤秀子  
太田温子  
中西深雪

語り 朝比奈 大原正巳

連調 浮舟  
佐藤陽 粟谷明生  
尾崎博美 今岡アイ子  
伊藤秀子 星野弘子  
中西深雪 永田聡子  
小林寿枝

仕舞 俊成忠度 本田洋子  
芭蕉 岩崎葉子  
松虫 鳥居久仁子

狂言 鶏 聒  
聒 佐野泰三 教手 加藤賢一  
小澤貞博 太郎冠者 加藤久和  
後見 山口俊一

仕舞 網之段 中西深雪  
当麻 伊藤秀子  
天鼓 太田温子

あいさつ

新城市長

穂積亮次

火入式

新城市議会議長

新城市教育委員長

夏目勝吾  
原田純一

舞囃子

草紙洗小町

中嶋康夫

大鼓 櫻本泰朗  
小鼓 小林寿枝

笛 今泉英三

狂言 棒 縛

主人 清川松佐

太郎冠者 天野雅夫  
次郎冠者 山本勝

後見 山口俊一

能 羽衣

シテ 杉浦史佳

ウキ 長田共永

大鼓 清水利高  
小鼓 森田收  
大鼓 中嶋康夫  
笛 今泉英三

後見 粟谷明生  
地謡 櫻本泰朗 佐藤陽  
太田研司 中村邦生  
竹内省吾 粟谷能夫  
鈴木崇史 粟谷浩之

附祝言

(終了予定 午後七時頃)

主催 新城市

新城市教育委員会

主管 新城市文化事業運営委員会

新城薪能実行委員会

後援 新城市文化協会

新城市観光協会

# あらすじ

狂言

鷄にわとり 智むこ

婿入りと言うのは、中世に見られた風習で、嫁を貰った男が舅のもとへ挨拶すること  
で正式な婿として認めてもらう儀式である。花婿が婿入りの礼儀作法を某（なにがし）  
にたずねると、某はからかって鷄のまねをするよう教えたので、花婿は舅の家へ着くな  
りさつそく鷄の鳴く真似をする……

狂言

棒ぼう 縛しばり

酒好きな太郎冠者・次郎冠者、二人の召使は主人が留守になるたびに酒蔵に忍び込ん  
では盗み酒をする始末。このことを知りつつ今日も外出する主人は、一計を案じてまず  
次郎冠者を呼びだし、最近棒の手の稽古をしている太郎冠者にその型をさせ、隙を見て  
縄で括りつけようと提案します……

能

羽衣はごろも

春の朝、三保の松原に住む漁師・白龍（はくりよう）は、仲間と釣りに出た折に、松  
の枝に掛かった美しい衣を見つけます。家宝にするために持ち帰ろうとした白龍に、天  
人が現れて声をかけ、その羽衣を返して欲しいと頼みます。白龍は、はじめ聞き入れず  
返そうとしませんでした。それがないと、天に帰れない。」と悲しむ天女の姿に心を  
動かされ、天人の舞を見せてもらう代わりに、衣を返すことにしますが、天人は羽衣が  
ないと舞うことができないので、まず返してくれといっています。白龍は羽衣を返したら舞  
を舞わずに、そのまま天に昇ってしまうのではないかといいますが、天人は「いや、疑  
いは人間にあり、天には偽りなきものを」（羽衣の曲で有名な詞）といっています。

そして、天人は白龍から衣を受け取り、羽衣を着た天人は、月宮の様子を表す舞など  
を見せ、さらには春の三保の松原を絶賛しながら舞い続け、やがて富士山かなたへ舞い  
上がり、霞にまぎれて消えていきました。

本曲は能の中でも人氣曲の一つです。

※仕舞とは能の一部を面・装束をつけず、紋服・袴のまま素で舞うこと。能における略式上演  
形態の一種で、伴奏は地謡のみによって行われる。演者は最初的一句を座ったまま謡い次に  
立ち上がって舞い、最後に打ち込みと呼ばれる型を行って座って一曲を終える。

## 新城と能

新城の能は新城の歴史とともに始まりました。長篠・設楽原の戦いの後、長篠城の城主であった奥平信昌は、新しいお城を郷ヶ原（現新城小学校）に築きます。これが新城という地名の始まりです。そして、天正四年（一五七六）、その落成祝いに観世与三郎を招き、城中二の丸で祝い能を催したのがこの始まりです。

その後、元文元年（一七三六）、領主管沼定用の家督相続を祝い、富永神社で能を奉納しました。これが例となり、祭礼のときに地区の氏子が社前で能を奉納するようになりました。

以後、この富永神社の能舞台（市指定有形文化財）で町衆によって二七〇年余り祭礼能（市指定無形文化財）として綿々と継承され、今に続けられています。

## 新城薪能

新城市においては新城文化会館が完成したことを契機に、平成二年第一回「新城薪能」が催され、市民の間で大好評を博しました。今回で二十六回目を迎え、新城の夏の風物詩として市民の皆様にご覧いただいております。

今後とも新城薪能は、富永神社で行われる祭礼能とは別に、流派を問わず誰でも参加できる、まさに「能どころ新城」を目指しております。現在、日本全国で二〇〇ヶ所ほど薪能が催されていますが、新城薪能のように、シテ方、ワキ方、囃子方、狂言方のすべてが素人というのはほとんど例を見ないといわれています。

この新城の能を、永い伝統を持つ富永神社祭礼能とともに、より市民の皆様にご愛されるように発展させていく事が私たちの願いです。

### 薪能に参加しませんか

新城薪能では、演能者を募集しています。

流派や経験は問いません。能・狂言に興味がある方はお気軽にお電話ください。

新城市教育委員会文化課

電話 ○五三六―三二一〇六四八